

# 夏目漱石とクラシック音楽

(第13回)

ロード・メイヤーズ・ショー

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

明治33年（1900）、「ラ・マルセイエーズ」の吹奏楽が響くなか、夏目漱石は横浜港を出帆した。同年10月28日にロンドン到着。こうして彼のイギリス留学は始まった。12日目の11月9日、日記によると、漱石は「Lord Major's Show」を見物している。

ロンドンには市長が二人いる。一人は言うまでもなく、市民による投票で選ばれる大ロンドンの市長。初代は、2000年5月4日に誕生した。もう一人は、約1マイル四方、すなわちスクエア・マイルの広さのシティ・オブ・ロンドンの市長である。初代は1189年あるいは1192年（諸説あり）に誕生した。このシティの市長は毎年9月末に、ギルドの会員たちの投票によって選ばれる。大ロンドンの市長はThe Mayor of London、シティの市長はThe Lord Mayor of the City of London、「Lord Mayor」という敬称が付いている名誉職であり、任期は1年間。

「ロード・メイヤーズ・ショー」とは、この名誉職の「新市長のお披露目パレード」のことである。ロンドンっ子たちは、この1年に一度の伝統的なお祭りを楽しみしている。その昔、パレードは10月28日に行われていた。10月28日は聖シモンと聖ユダの祝日であった。しかし、イギリスがグレゴリオ暦を採用するようになった1752年からは、11月9日に変更された。この慣習にしたがっ

て、漱石が見たのは11月9日であった。もともと、11月9日がウィークデーにあたった場合、シティの金融機関の業務に支障がでたり、交通渋滞になったりするので、1959年からは11月の第二土曜日と決められ、現在に至っている。

パレードの経路と主要地点の到着時間は、事前に新聞で告知されたので、漱石はどこに何時に行けばよいか、事前に把握していたものと思われる。

「ロード・メイヤーズ・ショー」はギルドの威力を誇示する絶好の機会である。1757年には、ゴージャスな黄金の馬車が特注された。その馬車はメンテナンスを繰り返しながら、現在も使われていて、ふだんはロンドンの歴史博物館に常設展示されている。したがって、私たちは漱石が見たのと同じ華麗な馬車を、今も見ることができる。

ところで、『漱石全集』第19巻には、漱石が1900年の手帳にしたメモが収められている。「bar 大ラッパ、cornett 小ラッパ」というメモは、とりわけ興味深い。漱石には初めての楽器だったに違いない。「bar」は「baritone」の略で、バリトン音域の大型金管楽器、コルネットはトランペットと同じ音域の小型金管楽器——大ラッパ、小ラッパなのである。

さて、今年の11月の第二土曜日は、奇しくも11月9日である。近衛軍楽隊の吹奏楽に先導され、新市長は6頭立ての馬車でシティを巡る。